

学校だより NO. 448
Bグループ9月29日 / Aグループ9月30日



〈横浜の教育がめざす人づくり〉

自ら学び 社会とつながり ともに未来を創る人

〈学校教育目標〉

夢や希望をもち、自らの生き方を追求する姿勢をはぐくみ、互いの良さを認め合いながら、ともに社会の創造に貢献しようとする態度を養います。

・知 生きて働く知 ・徳 豊かな心 ・体 健やかな体
・公 公共心と社会参画 ・開 未来を拓く志

横浜市立品濃小学校 電話 824-0651 FAX 826-2183
URL <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shinano/>

撫育草（そだてぐさ）

校長 坂井 暢

成長していくわが子を見てみると、果たして子育てはうまくいっているのか、ふと不安がよぎるものである。どんなに大きくなってもいつまでも子は子。親はずっと責任を引きずっている。子育ては永遠の課題である。

江戸時代にも多くの育児書や教育書が書かれていた。その一つに江戸末期に編まれた「撫育草(そだてぐさ)」という書がある。厳格に育てようとする武家の習いとは異なり、町人向けの童子教訓である。「温和にそだつる方に及(し)くはなし」。悪事を折檻(せっかん)で罰するより、善行をほめた方が幼心にもうれしく、心豊かな子に育つという考え方だ。体罰は道徳的に腐敗しているとして否定している。もちろん、嘘やわがまま、稽古事を怠けることなどは厳しく戒めた。父親目線で書かれたものであるが、現代でも十分に通用する教育論である。

今や全国に広がる現代版「撫育草(そだてぐさ)」がある。

(1) 乳児はしっかり 肌を離すな (2) 幼児は肌を離せ 手を離すな

(3) 少年は手を離せ 目を離すな (4) 青年は目を離せ 心を離すな

という「子育て四訓」だ。山口市で中学校長などを務めた緒方甫さんが長年の経験を基にまとめたものだ。子どもたちの健やかな成長と家庭教育の大切さについて、この短い文から、たくさん示唆を感じることができる。

小学校の時代の子どもたちに当てはめてみると、1・2年生は幼児期後半、3～6年生は少年期に当たるだろうか。

幼児は乳離れはするが、一気に離すのではなく、常に親がそばにいるところで「心配しなくてもいいよ」という安心感を与えることが大切。周囲のものに注意や関心を持ち、自立のための第一歩の段階である。その意味では、自立に目覚める幼児期は、完全保護から社会に向けて一步を踏み出す時期と言える。

少年は、友だちとの付き合いによって社会性が育つ時期なので、しっかり手を離し、活動範囲を広げてやらないといけない。ただし、いろいろな危険があるので、目を離してはいけない。

この時期の子どもは、親に反抗したり、問題行動に走ったり、いろいろなことで苦しい思いをするかもしれない。しかし、それは成長の過程であり、親として逃げずに、共に成長することを心がける必要がある。子どもの荒れの背景には、親や友だちに「こっちを向いてほしい」というメッセージが隠されていることが多いから。

小学校は6年間というとても長い期間、子どもたちが過ごす教育の場である。しかし、子どもたちの教育は学校だけでできるものではなく、家庭との連携・協力が不可欠となる。教育においては、「いじめ」や「体罰」をはじめとして、正面から取り組んでいかなければいけない課題がたくさんある。こうした教育課題に加え、現在のコロナ禍。良い解決と子どもたちが安心して学べる学校づくりのためにも、これまで以上に学校と家庭が手を取り合っていく必要があると考えている。

保護者の価値観が多様化し、家庭環境がいくら変化しても手放せないものがあると思う。昔も今も変わらぬ不易なものを大切にしながら、これからも、より良い学校を創っていきたいと考えている。

新規感染者の急激な減少により、緊急事態宣言も解除される見通しです。それに伴い、分散登校期間も終了し、来週からやっと、本格的な学校の再開となりそうです。まだまだ気が抜けない日々が続きますが、引き続き、ご協力よろしく願いたします。